夢端草 下

ぐるぐるめー

夢端草

むたんそう

下

ぐるぐるめー

この物語は架空の世界で描かれるフィクションであり、実在する商品、団体、地名、人物とは一切関係がありません。

この物語には男性同士の同性愛表現があります。

一部性的な表現があるため、18歳未満の閲覧はご遠慮ください。

目次

第十六話　マクソン工房の過去……8
第十七話　恋人になれない理由……17
第十八話　ネコちゃんがやってきた！……26
第十九話　ジェイクの誕生日……35
第二十話　発情（R18）……44
第二十一話　かけがえのない存在……60
第二十二話　ロゼッタ危機一髪……70
第二十三話　学校と再会とお宝探し……90
第二十四話　どこにも行かないで……100
第二十五話　ロゼッタの誕生日……108
第二十六話　TP工房の思惑……117
第二十七話　行くな、アントン！……125
第二十八話　おかえり（一部R18リバ）……136

第二十九話　幼い恋の話……152
第三十話　ロゼッタ帰国……162
第三十一話　プレゼント……173
第三十二話　久しぶりに帰ったら六角関係になっていたわけだが……185
あとがき……194

第十六話　マクソン工房の過去

それは、いつもと同じ朝だった。ある客がやってくるまでは。

ジェイクはカウンターに座って新聞を読みながら退屈そうに店番をしている。アントンは武器の修理をしているし、ロゼッタはその横で小学校の勉強を自習している。何の変哲もない日常だった。

そこへ、きょろきょろと誘い込まれるように一人の熊族（グリズル）の男がやってきた。

「いらっしゃい」

玄関のベルを鳴らして入ってきた男に、ジェイクが声をかける。

「こんなところに武器屋ができていたんだな」

「ここ五～六年前からかな、店を始めたのは。老舗武器屋・マクソン工房の六代目、世界中のマニアックな武器を専門に取り扱う知る人ぞ知る名店・ジェイク様の武器屋だぜ！何かお目当てのものはあるかい？」

そう、お決まりの台詞を謳うジェイクに、熊族（グリズル）の男は眉根を寄せた。
「老舗武器屋マクソン工房？どっかで聞いた名前だな……」
「お、マクソン工房を知っているのかい？一度は看板を下ろした店だが、その息子の俺様が最近跡を継いだのさ」
「ふーん……」
熊族（グリズル）の男はしげしげと店内を物色していたが、店に入って左手奥に工房を見つけたことで、彼の記憶が鮮明になった。そうだ、ここは……。
「あ！思い出したぞ！ここに来たことがある！なまくらの武器を高値で売りつけたせいで廃業した武器屋だな！そうだ、マクソン工房！あんたはそのせがれか！」
それを聞いてジェイクが顔をしかめた。
「何だと……？」
「不祥事起こして看板下ろしたマクソン工房が、よくもまあ同じ名前で店を続ける気になったもんだ。あんた、見たところまだ若いし、昔この工房がどんな悪徳

商法していたか知らないだろう？親父さんはかなりの悪党だと有名だったんだぜ」
「帰れ」
「何？」
ジェイクの耳が後ろに反り返っている。
「親父の悪口言う奴はうちの客じゃねえや。この店は俺が新しく看板掲げた新しい店だ。前の店とは関係ねえ。昔のこと引っ張り出してくるような奴はうちの客じゃねえ。帰れ」
熊族（グリズル）の男はそれを聞いて憤慨した。
「しかしこれは事実だ。あんたはガキだったろうから知らないだろうが、よくもまあ恥ずかしげもなく店を継ぐ気になったもんだ。親父が何したか知らないだろう？あんたの親父は」
「んなこと言われなくても全部知ってらあ‼ 知ってて店継いでんだ！昔の事ほじくり出すんなら来んな！帰れ！」

ジェイクはカウンター下から銃を取り出して構えた。ここは武器屋だ。如何な図体の大きな熊族（グリズル）であっても、脅しに使える武器は潤沢にある。熊族（グリズル）の男はその迫力に負けて引き下がった。

「マクソン工房のせがれは人殺しか？チッ、わかったよ。言われなくてもこんなインチキ武器屋の武器なんか買わねえよ！あばよ！どうせすぐ潰れるだろうけどな！」

そう捨て台詞を吐いて、熊族（グリズル）の男は立ち去った。穏やかではない空気を感じ、奥からアントンとロゼッタが顔を出して様子を窺っていた。

「ジェイク……またお客様を追い出したんですか？そんなことをしていたら本当に客が来なくなってしまいますよ？」

「ジェイク、銃を仕舞って。怖いよ」

それに気づいて、ジェイクは銃を仕舞い、努めて明るく笑って見せた。

「アハハ、わりぃわりぃ。いやな、ああいうナメた客にはナメられないようにしねえとよお！この店はマニアックで通してっから、表の通りの猿の武器屋みたい

に誰にでもニコニコなまくら武器なんか売ってられねえんだよ」
アントンは見抜いていた。ジェイクがへらへら笑うときは本心を隠している。無理をして強がるとジェイクはへらへらと笑って見せる癖がある。おそらく傷つくようなことを言われたのだろう。
「あの熊族（グリズル）が言っていたこと……昔このマクソン工房で何があったのですか？あなた、最初に、昔はこの工房にもたくさんの職人がいて、今はいないと言っていましたよね？良かったら、僕たちにマクソン工房の過去を話してくれませんか？」
ジェイクはしばらく黙して俯き、迷っているようだった。だが、いい機会だと割り切り、大きく深呼吸をすると、工房の椅子に腰かけ語り出した。アントンとロゼッタも着席して傾聴する。
「昔、ほんとに、ちょっとしたことで、この工房は信用を失墜したんだ」
今から15年ほど前、マクソン工房には沢山の職人がいて、武器の修理だけじ

やなく、鍛造も、卸も、武器に関することなら何でも一手に引き受ける名店だった。世界中の人がこの工房で武器を鍛え、この工房で生まれた武器を買い、この工房に珍しい武器を売り買いしに来た。マクソン工房っちゃ有名だったんだ。俺も金持ちの息子だったからそりゃあ贅沢させてもらって育てられた。

だがな、ある日、あんまり毎日忙しいから、ちょっとミスってな。修理に出されて、まだ修理されてない壊れた武器と、新品を取り違えて間違って売っちまったんだ。ぶっ壊れた武器を売りつけられた奴はカンカンよ。で、そいつが拡声器みたいな奴でさ。あっという間に「マクソン工房は手抜き仕事を売りつける悪徳武器屋だ」って法螺（ほら）を吹きまわったんだ。

うちの両親は謝罪して新品と交換したんだけど、そいつの怒りは収まらなかった。裁判になって、うちの店は敗訴しちまったんだよ。

幸い慰謝料は軽かったんだけど、その噂は大スキャンダルになった。で、両親は看板を下げて、マクソン工房は閉店・解散したんだ。

両親は俺を親戚の家に預けて行方不明になっちまった。多分死んだんじゃねえ

かって話になってる。俺は親戚に育てられて学校卒業した。
独り立ちしてこの街に帰ってきたころ、この店舗はまだそっくり昔のまま残っていた。この店舗は爺さん婆さんが守り続けていたんだよ。だから俺は世界各地から武器を仕入れて、爺さん婆さんと一緒に店を再建したんだ。その爺さん婆さんも、二〜三年前に立て続けにぽっくり行っちまった。
だからな、この店の半分以上の在庫は昔から売れ残っているお宝ばかりだけど、昔とは全く別の店なんだよ。俺は猫族（シェルパ）が強いから細工物ができない。だから、もっぱら卸売ばっかりだったがな。

「これがこのマクソン工房の過去だ。ほんのちょっとしたミスだったんだよ。それだけで、炎上。有名な老舗だったから余計にな。あっけないもんさ、栄華なんて」
ジェイクとロゼッタは暗い顔をして傾聴していた。想像以上に暗い過去に、何も言葉が出てこない。ジェイクは続ける。

「だから俺、この武器屋をもっと大きくして、マクソン工房の歴史を継ぎたいんだ。新しくなったマクソン工房・ジェイクの武器屋として！店が大きくなったら、昔の職人も帰ってくるかもしれねえしな！」
アントンとロゼッタはテーブルに置かれたジェイクの手に、手を重ねた。
「店の再建のために、僕も尽力します。新しいマクソン工房を作りましょう」
「あたしもいっぱいお手伝いするから、お店、大きくしようね！」
ジェイクの胸に暖かいものが広がった。
「お前ら……」

その夜、昔のことを思い出したジェイクは、跡取りについて考えた。店を大きくするには、跡取りを産んでくれる妻が必要だ。
「モモ……俺は、お前に跡取りを産んで欲しいんだ……」
モフモフの黒猫娘の柔らかそうな容貌が、ジェイクの胸を締め付ける。あの柔らかそうな、フワフワの胸に顔をうずめてみたい。妻に迎えたい女は、モモしか考えられない。

「モモ……俺……」

ジェイクは恋しさと切なさに痛めた胸を抱えて、毛布の中に深く潜った。

第十七話　恋人になれない理由

ジェイクは、いつまでも恋しさを引きずったまま他の誰かに奪われるぐらいなら、まだ独身のモモに想いを告げて奪い去ってしまおうと考えた。

実は過去に告白したことがある。まだ学生時代の頃だ。その時はあっけなく振られてしまい、斑毛症の我が身を呪ったものだが、今はアントンやロゼッタのおかげで昔より自信を持って過ごせるようになった。

今なら言える。

一度そう考えだしたら居ても立ってもいられず、ジェイクはモモの店に立ち寄り、予定を取り付けた。

「モモ、次はいつ休みなんだ？」

「んー、来週の火曜日かな」

「そっか。じゃあ、来週の火曜日食事に行かないか？」

モモは第六感で嫌な予感がしたが、無理やり誤魔化せるようなちょうどいい予

定もなかったので、作り笑いを浮かべて承諾した。
「ん……いいよ！何も予定ないし」
「じゃあ、火曜日な‼」
モモはジェイクが何を考えているかなんとなく察していたが、気にしないよう努めた。

さて、ジェイクには待ちに待った火曜日だ。夕方ごろワインバルに店を予約してある。ジェイクが一張羅を着てプレゼントのネックレスを忍ばせ待っていると、少し遅れてモモがやってきた。モフモフの肌を大胆に見せたパーティードレスだった。露出した両腕の柔らかそうな毛並みに、今にも顔をうずめたくなる。
「待った？」
「いや、今来たとこだよ」
二人はマタタビワインと牛ステーキを注文し、しばし穏やかに歓談した。ジェイクがアントンとロゼッタの話を面白おかしく語って聞かせるうちに、モモは（ジェイクに家族ができてよかったなあ……）と眩しそうに目を細めた。

「それで……今日はお前に、プレゼントがあるんだ」
「プレゼント？なあに？」
ジェイクは懐の内ポケットから長い小箱を取り出してモモの前に差し出した。
「開けてみてくれ」
促されて開けてみると、中にはハート形のリングがあしらわれたネックレスが入っていた。ピンクゴールドの、決して安くはないだろうという雰囲気のネックレス。
「モモ、俺、やっぱりお前が好きだ。結婚を前提に付き合ってくれないか？」
モモは「やっぱりきたか」と、顔を曇らせてネックレスを突き返した。
「ごめん、ボク、ジェイクのことは男性として見れないから」
「なんでだよ！」
「決めたんだ！」
突如ジェイクの言葉をさえぎって叫ぶモモに、ジェイクは面食らった。
「ジェイク、ミミと結婚してあげて」

「は？ミミ ?! なんで？」
突如出てきた意外な人物の名前に、ジェイクは耳を疑った。なぜ、モモの双子の姉のミミの名前が出てくるのか。
「ミミはね、子供の頃からジェイクのことが好きだったの。だから、ボク、ジェイクとは付き合えない。ミミと結婚してあげて、ジェイク。ミミは、ジェイクと付き合えないことを気にして、レズパブで働き始めたの」
そんな話は本人からも聞いたことがない。もしそれが本当なら、ミミ本人に真偽を確かめて、はっきりさせてから進路を決めたいところだ。
「ま、待て、それ本当か？ミミからそんな話一回も聞いたこと無いぞ？もしそれが本当なら、ミミ本人から詳しく話を聞きたい。ミミの店に行かないか？」
ジェイクは突き返されたネックレスの箱を内ポケットに仕舞い、ミミが働くレズパブ「花園」へはしごした。

「ジェイク、お前ここがどんな店か知らねえわけじゃねえよな？」
久しぶりに店にやってきたモモの隣に、男性であるジェイクの姿を見止めて、

ミミは顔を曇らせた。ミミはショートヘアのヘルメット模様の猫族（シェルパ）で、鼻から下だけ白く、他は真っ黒な毛に覆われていた。顔の右側を大きめの眼帯で覆っている。ミミは生まれつき右目が見えない隻眼だった。

「解ってるつもりだ。だが、今日は話があってきたんだ。マタタビ酒のカクテル頼むよ」

「花園」は男子禁制のレズパブだ。特別な許可のない男性は入店禁止である。ミミはマスター（元女性）に特別に許可をもらい、個室で話を聞くことにした。

「で？話ってなんだ？」

「ミミ、単刀直入に訊く。お前子供の頃から俺のことが好きだったって本当か？」

「はあ?!」

ジェイクの言葉にミミは仰天した。寝耳に水である。ミミは人生で一度も心をかすめたことすらない話を全力で否定した。

「なんで俺がジェイクのこと好きにならなくちゃならねーんだよ？俺は子供の頃

から女にしか興味ねーよ！誰だそんな法螺を触れ回ったやつは？やめてくれよな、商売の邪魔だ‼」

それを聞いてジェイクもほっと胸をなでおろす。

「だよなあ！安心した！俺もお前はずっと女好きだと思ってたからよお、ミミと結婚しろなんて言われて目ん玉飛び出したぜ！」

「なんで俺が結婚なんかしなくちゃなんねーんだ！マタタビ酒吐くぞ！」

あっはっはと笑い合うジェイクとミミに、今度はモモが驚いた。

「えっ、ミミ、昔ジェイク好きだって言ってたじゃん！」

「言ってねえ！勝手なこと言うな！」

モモは解らなくなった。子供の頃からずっと、ミミはジェイクのことが好きだと思っていた。だから、双子の妹として、ミミの恋路を邪魔してはいけないと思って生きてきた。だが、それは思い違いだという。では、モモはジェイクと付き合っても全く問題ないというのだろうか。

ふと、ジェイクは昔のことを思い出した。

「そういやあ、俺の仮面はミミの眼帯が羨ましくて親に無理言って作ってもらっ

たんだよなあ」
　ジェイクは生まれつき右目の視力がないミミの眼帯を羨んでいたことを語った。
「え、マジで？道理で同じ右側に何か付け始めたなと思ったぜ。俺とそっくりじゃねえか。真似しやがったなと思ったけど、やっぱり真似しやがったのかてめえ？」
「だってミミの眼帯カッコいいだろー！コンプレックスが隠せて尚且つカッコいいって羨ましくてさ」
　昔の話に花が咲くジェイクとミミ。一方モモは心に詰めていた蓋が外れ、行き場のない想いのやりどころに狼狽していた。
（ミミは、全然ジェイクのことが好きじゃなかったの……？じゃ、じゃあ、僕はジェイクと付き合っても問題ないの？え、でも……）
「そういうわけで、ミミは俺のこと好きじゃなかったみたいだ。俺と付き合っても問題ないだろ、モモ？」
「お前がジェイクと結婚しろよ。悪くないと思うぜ、お前ら」

急にジェイクとミミに話を振られて、モモは取り乱した。
「そんな、急に言われても、ボクだってどうしたらいいかわからない！今更ジェイクなんか好きになれないよ！」
そう言ってモモは個室から飛び出し、店を出て逃げ出した。どこでもいい。どこか頭を整頓できる場所に行きたい。
「モモ！」
ジェイクは追いかけようとしたが、ミミに尻尾を掴まれた。
「ほっとけ！モモの分のお代はきっちりお前が払って行けよ！」
職務上痴話喧嘩で店を飛び出す客に慣れているミミは冷静だ。
「ああっ、そんな場合じゃねえだろ！ホラ、釣りはいらねえぜ！じゃあな！」
ジェイクは大目にミミにファルス紙幣を握らせると、モモの後を追った。しかし、そのころにはモモの姿は影も形も無くなっていた。
繁華街から離れた公園のブランコに乗って、ゆらゆら揺られながら、モモは一人泣いていた。

本当は、ジェイクと付き合ってもいいかと思った時期もある。しかし、ミミがジェイクと親しそうに話している姿を見るたび、「ミミからジェイクを奪ってはいけない」と自分の心に蓋をしていた。

そうしているうちに、モモは次から次へと男性に声を掛けられた。

「ボクは別に誰でもいい。ジェイクはミミのものだ。だから、ボクは他の人と幸せになるんだ」

そう思って次から次へと恋を楽しんだ。

モモは影で男ならだれにでも股を開く女だと噂されていることも知っている。それでもよかった。ただ、ジェイクだけはミミにあげなくてはと思って生きていた。それなのに。

「今更ジェイクと付き合えなんて言わないでよ……。ボクは、ずっとジェイクから一生懸命目をそらしてきたんだ……今更、今更……」

モモは、ジェイクを好きになれない理由を必死で考え始めた。

「何でもいい、心が安心になる理由を、誰か教えて……」

第十八話　ネコちゃんがやってきた！

ジェイクの店は武器屋である。そう頻繁にお客で賑わうような店ではない。今日もジェイクは退屈そうに、ごくたまにやってくる上客が訪れるのを待っていた。

「あー退屈だなあ。猫でも飼うかな」

それはほんの気まぐれに吐いたボヤキだったが、猫族（シェルパ）のジェイクの口から出た「猫を飼う」という言葉にアントンとロゼッタは仰天した。

「ええ?! ジェイクが猫を?!」

「それって、ジェイク的にどうなの?!」

しかしアントンとロゼッタの驚きポイントにピンとこないジェイクは訊き返す。

「ジェイク的にどうなのって……俺が猫飼っちゃいけねえのかよ」

アントンとロゼッタには奇妙に感じる。猫にそっくりな人間の猫族(シェルパ)が、猫を飼育する。猫が猫を飼育するというのはどんな感覚なのだろう。

「ジェイク 猫族(シェルパ)でしょう?猫族(シェルパ)にとって猫ってどうなのかなと……」

「猫は猫だろ。ペットじゃん。なんか問題でも?」

一方ジェイクにとって猫はただの猫という認識らしい。アントンとロゼッタが問題に感じる意味がよく解らない。

「え……ジェイクにとって、猫って猫なんだ?」

そこでやっとアントンとロゼッタが言わんとしている意味に気づいたジェイク。おそらく二人は何か勘違いしている。

「……あ!俺が猫族(シェルパ)だから猫飼うのはおかしいって言いたいのか?!あのな、猫族(シェルパ)は猫じゃねえぞ?!猫族(シェルパ)は人間!!猫は猫!ただのペット!ライオンもトラも動物!猫族(シェルパ)とは別の生物!」

「えっ……そういう認識だったんですか」

確かに猫族（シェルパ）は山岳猫という山岳地に生息している大型猫種が進化して生まれた人種である。猿の一部の類人猿が進化して猿族（エイプス）になったのだと考えれば、猫族（シェルパ）が猫をただの動物と認識することに特に不思議はないのである。

「アントンも猿族（エイプス）だからって猿呼ばわりされたらムカッと来るだろ？」

「あー……、確かに猿族（エイプス）は猿ではないですね。猿族（エイプス）は人間。猿は猿」

その共通認識に、同じ系統からは外れた妖精族（エルヴェン）のロゼッタは驚く。

「え?! そういう感じなの?! あたし猫族（シェルパ）や猿族（エイプス）は猫や猿は仲間なのかと思ってた！」

「ロゼッタ……お前な……。まあ、妖精族（エルヴェン）は下位互換がないからそう感じるのもおかしくはないか」

確かに妖精族（エルヴェン）はシーやエルヴェンやフェアリーなどいくつかの系統があるが、どの系統の人種も高度な知性と文化を持つ知的生命体なので、動物と呼べる下位互換はない。

「かいごかんってなに？」
「ペットになる動物ってことだ」
「あー、妖精族（エルヴェン）のかいごかん、ないね」
と、いうことは、だ。二人はジェイクのことを猫畜生と変わりないと認識していたということになりはしないか。
「ん？待てよ。てことはアントンもロゼッタも俺のことその辺の猫と同じだと思ってたのか?!」
慌てて二人は弁解する。
「いやいやいや、決して、そんなことは」
「ジェイクは可愛いけど、人間だと思ってるよ」
「可愛いって何だお前?! やっぱ猫だと思ってたのか……」
「思ってないったら！」
猫族（シェルパ）は他の種族からナメられやすいとは感じていたが、ここにその証左が示された。やはり他種族は猫族（シェルパ）を大きな可愛い猫と思っていたのである……。

このままだとまずい空気になりそうだったので、アントンは話題を逸らした。
「じゃあ、猫を飼うとして、ジェイクはどんな猫が欲しいんですか？」
「え？ああ～、猫飼うなら絶対これって決めてるのがいるんだ」
「どんな猫？」
「長毛でモコモコの黒猫の雌」
長毛で、モコモコで、黒猫。且つ、雌猫。それは、つまり……。
「ジェイク……モモさんのこと……」
ジェイクは慌てて弁解する。
「モモのことは意識してねーよ?! モモは人間だからな ?! 確かに特徴は似てるけど、猫は猫！モモの代わりになんかしねーし！」
必死なのが余計に怪しい。ロゼッタも白い目を向ける。
「モモさんに振られたからって猫で紛らすのはやめなよ。猫ちゃんが可哀想」
「だから！ちっげーって！猫の好みとモモは似てるけど別物だから！」

猫族（シェルパ）のジェイクが猫でどう気を紛らすつもりなのかはあまり考えたくないことだ。
「まあ、黒猫の長毛は可愛いですね。雄は嫌なのですか？」
アントンの問いに、ジェイクは希望を答える。
「どうせだったら増やしたいじゃん？雄雌つがいで飼ってもいいかもな」
だが、猫と猫族（シェルパ）の赤ん坊は一見して見分けがつかない。髪の毛のあるなしで一応区別はつくが、猫族（シェルパ）の子供と成猫は大きさもさほど変わらない。
「ジェイクが猫飼ったら絶対ジェイクの子供に見えちゃうよ……。尻尾で猫じゃらしとかするんでしょ？」
「猫じゃらしはわざわざおもちゃ買うより尻尾でじゃらすので十分なんだよ」
大きな猫である猫族（シェルパ）のジェイクが、尻尾で子猫をじゃらす姿を想像する。それは、サバンナで子ライオンをじゃらす母ライオンの姿と何が違うのだろう。
「大きな親猫……」
「なんか言ったかアントン」

「いえ、微笑ましいなと」
アントンはニコッと微笑んで誤魔化した。

猫の話をしたらどうしても今すぐ猫が欲しくなってしまった三人は、早々と店じまいをし、ペットショップに向かった。可愛い子猫や子犬がケージに入って陳列されている。
「黒猫……長毛……いねえかな……」
すると、店の奥に隠れるようにして一匹の黒猫の長毛種がケージの中で震えていた。
「いたーー !! 長毛黒猫！」
ジェイクたち三人がケージに張り付いて黒い子猫に見入っていると、熊族（グリズル）の店主が三人に近づいてきた。
「お気に入りが見つかりましたか？」
「お、おう！黒の長毛が欲しかったんだ！こいつ、いくらだ？」

「黒猫は人気がなくて、その子はなかなか売れなかったんですよ。結構大きく育ってしまったので、特別に五〇〇ファルスでいいですよ」
「五〇〇?! そんなに安くていいのか?」
「処分価格です」
「買った！」
ジェイクは即決した。
「ありがとうございます」
そのままペットショップで猫のトイレとトイレ砂、餌の皿と餌を購入し、上機嫌で三人は帰路に就いた。
「名前何にする?」
「カトリーヌにしようぜ！」
しかしここで、アントンが重要なことに気付く。
「そういえば、性別を確認していませんでしたね。雄かな、雌かな」
アントンが子猫のお尻を確認すると、小さな毛の塊が肛門の下についていた。
「雄ですね」

「お、雄――――――?!」
「どうします？名前？」
「適当に……カールとでもつけてしまえや……」
ジェイクは意気消沈して、しぶしぶ猫の名前をカールと名付けた。
だが、数日も一緒に暮らすと、カールはジェイクによく懐き、ジェイクはすっかりメロメロになっていた。
「雄猫だけど、可愛いなこいつ」
以降、カールは三人の愛情を受けすくすくと成長し、ジェイクの店の看板猫として活躍するようになったという。

第十九話　ジェイクの誕生日

アントンは悩んでいた。壊れるほど愛しても何とやらで、ジェイクにイマイチ愛が伝わっていない気がする。特に、日ごろ送っている贈り物がイマイチ喜ばれない。

ある日はジェイクのためにお高い花束を送っても、店に飾るいつものお花がちょっと豪華になる程度で、ジェイクはちっとも喜ばないのだ。

またある日はケーキを買って帰ったこともある。その日のケーキはジェイクのためのものだったのに、ジェイクは半分以上ロゼッタに食べさせてしまった。

ならばと思ってジェイクのシャワーに押し入り体を流すサービスをしようとしたら本気で怒られ引っ掻かれた。

今日もジェイクのためにマタタビ酒を購入してきたのに、「サンキュ」の一言で棚に仕舞われてしまった。

何を隠そう、アントンは恋愛経験値がゼロなので、アプローチの仕方が壊滅的に下手だった。この点で言えば、おませなロゼッタの方がアントンに勝ってい

た。ロゼッタは自分の美貌を若干八歳にしてうまく利用している。女の武器の使い方を備えているのだ。

ロゼッタは困ったことがあると泣いてジェイクに縋りつき、ジェイクに助けてもらってはあざとく「ありがとう」の一言でジェイクの笑顔を引き出すし、その辺の草花を摘んできて食卓の花瓶に活けて見せればジェイクに頭を撫でてもらえる。

アントンは一歩リードしているように見えるロゼッタへ憎しみが止まらない。決して表には出さないが、内心憎くて仕方ない。

「ジェイクって、ロゼッタには甘いんですよね」

キッチンの棚にマタタビ酒を収めたジェイクに、アントンは堪りかねて恨み言を呟いた。

「え?そうか?」

「だってそうじゃないですか。僕がいくらジェイクにプレゼントしてもジェイクそんなに喜ばないし」

「そんなことはないぞ。喜んでるって。マタタビ酒、好きだし」

「じゃあもっと喜んでくださいよお……」
喜べと言われても、何でもない日のプレゼントなどどういう顔をしていいかわからない。と考えて、はたとジェイクは手を打った。
「あ、じゃあさあ、今月末俺誕生日だから、誕生日プレゼントくれよ。そのプレゼントがカッチョよかったら、たぶん俺喜ぶと思うぜ」
「え、今月末誕生日だったんですか?!」
「うん」
アントンは燃えてきた。
「必ずやあなたを喜ばせて見せます！」

その日の夜、ジェイクはロゼッタにも誕生日の話を伝え、ジェイクバースデー争奪戦の火蓋が切られた。
ロゼッタはこの点策士だった。ジェイクの喜びそうなものをジェイクの知り合いにリサーチして回ったのだ。小学生とはいえ、女子だ。友達の誕生プレゼント選びはお手の物である。さらに今のロゼッタは冒険者レンタルで給料を手に入れ

ているため、子供にしては破格の金持ちである。愛するジェイクのために惜しげもなく財力を使えるのである。

ロゼッタは商店街の人たちからジェイクの好きなものをリサーチし、リストアップしていった。

やがてモモのところにもやってきて、モモにジェイクへのプレゼントを相談する。

「ねえモモさん、ジェイクって、誕生プレゼント何喜ぶと思う？」

「うーん、そうだなあ。お小遣いはいくら持ってるの？」

「六〇ファルスぐらい？」

「ろ、六〇 ?! 随分持ってるんだね！」

「働いてるから……」

「あ、じゃあ、この前商店街でこんなもの見つけたんだ。仕事終わったらボクと一緒に選びに行こう？」

「いいの？ありがとうモモさん！」

モモはロゼッタを商店街のとある店に連れて行き、一緒にプレゼント選びをし

た。そのことをロゼッタはアントンに自慢げに語る。
「モモさんにジェイクへのプレゼント選んでもらったんだあ！いいでしょ。アントンには負けないすっごい良いもの選んだんだよ！」
衝撃だった。確かに、自分一人でプレゼントを選ぶには限界がある。相談すればよかったのだという根本的な解決方法を知り、人間関係構築経験ゼロのアントンはロゼッタから学習した。
「フフフ……そう……そうか……。負けないよ、ロゼッタ」
早速アントンは翌日モモに相談に行った。
「モモさん、ジェイクの誕生プレゼント、何がいいと思います？」
二日連続でプレゼント選びの相談に乗ることになるとは。モモは（ジェイク愛されてるなあ……）と思いながら、アントンに提案した。
「うーん、そうだなあ。ボクならペンダントをプレゼントするかな」
「ペンダント？」
「ジェイク、ペンダントとかウォレットチェーンとか、そういう男っぽいアクセサリー好きなんだよ。集めているみたい。結構その日掛けてるペンダントでゴキ

ゲン具合判るよ」
初耳だった。確かにペンダントが違う日が稀にある。それでバロメーターを知ればいいのか！
「あ、じゃあ、一緒にペンダント選んでもらえますか？」
「いいよ。仕事終わったら選びに行こう？」
アントンは「今度こそは勝った」と確信を持った。
競い合うようにジェイクのプレゼントを選ぶロゼッタとアントンを見て、モモは心なしかほっとした。ジェイクを好きにならなくて済む理由は、これかもしれない。
（ボクはやっぱり、ジェイクを好きになっちゃいけないんだ）

待ちに待ったジェイクの誕生日がやってきた。アントンはジェイクのために料理の腕を振るい、ロゼッタはジェイクのために大きなバースデーケーキを買ってきた。宴の始まりである。
『ジェイク、誕生日おめでとう !!』

バースデーケーキには二九個のラズベリーが乗っていた。ロゼッタのセンスで選んだケーキは可愛らしいものだった。

「ありがとうな、お前ら」

ご馳走にケーキにマタタビ酒。ジェイクは嬉しそうだった。

晩餐が終わるとプレゼントの時間だ。アントンは小さな箱を取り出し、ジェイクにプレゼントした。

「ジェイク、これ、プレゼントです。開けてみてください」

「おおー、いよいよプレゼントか。どれどれ……」

箱の中には虎目石の原石のペンダントが入っていた。荒くかち割った武骨な茶色の石は、ギラリと繊維状の輝きを放っていた。そのゴツゴツとした男らしい風合いに、ジェイクは歓喜した。

「おおおおおおカッケエ――――!! これこれ！こういうのだよ！それに、お前知ってて選んだか？虎目石は商売繁盛の石なんだ！欲しかったんだよなー。ありがとな！」

アントンは思わずガッツポーズした。

「喜んでいただけて嬉しいです !!!」
「ふん！あたしはもっとすごいのだもん！ジェイク、開けてみて！」
ロゼッタが取り出したのはずいぶん大きな箱だった。大きさの割には軽いので、不思議に思いながら開けてみると、中から出てきたのは仮面だった。顔の右側を覆い隠す、透かし模様のお洒落な片仮面。
「これ……仮面か？ちょっとつけてみていいか？」
「アントン鏡持ってて！あたしがつけてあげる！」
ロゼッタはジェイクの革の仮面を外し、プレゼントの片仮面を拙い手つきで付けて見せた。アントンが構える手鏡を見て、ジェイクは感動した。
こんなにお洒落な片仮面を、ジェイクは付けたことがなかった。
「かっ……カッケエ……」
「どう？」
「いや、これ、やべえ、泣きそう」
「泣いていいよ♪」
「うううう〜〜！ありがとなロゼッタ !!」

アントンはジェイクの喜びように、またしてもリードを許してしまったなと思いながら、ジェイクの美しい仮面姿に、ジェイクが喜ぶのも無理はないなと勝ちを譲った。

「この仮面は、お洒落するときに使わせてもらうよ。大切にしたいんだ」

「うん、いいよ。ジェイク誕生日おめでとう！」

そういうと、ロゼッタはジェイクの頬にキスをした。

「あ！ああ〜〜‼」

悲鳴を上げるアントンをよそに、ジェイクはロゼッタの頭を撫でる。

「焼き餅焼くなよアントン。いいじゃねえか」

「よくないです！」

「へへーんだ！べえーっ！」

勝ち誇ったようにあっかんべをするロゼッタに、アントンは憤慨する。

「お前ら、今日くらい仲よくしろよ！」

喧嘩する二人をたしなめるジェイクだったが、その顔は喜びに満ちていた。